

高知女子大学共通教育英語科目の 運営について(2005-2007 年)

五百蔵 高浩

山口 善成

はじめに

高知女子大学（以下「本学」という）は 2005 年 4 月に共通教育英語科目に関してカリキュラムの抜本的な見直しを行った¹。本稿は開始から 2007 年度までの取り組みを報告する。まず、旧カリキュラムから現行のカリキュラムに至る経緯を辿る。次に現行カリキュラムの枠組と特色について説明し、これまでの取り組みを報告する。²

1. カリキュラム改革までの経緯

まず、改革を促すことになった背景について説明する。入学してきた学生に対し大学の英語教育を通して何を身につけさせたいのかという観点から考えれば、旧カリキュラムが抱えていた問題点は明らかであった。

1. 技能別に構成されているわけでもなく、難易度配列されているわけでもなかった³。
2. 同一の名称を持つ科目でありながら、ねらいの設定から授業担当者ごとに異なっていた。また、どれほどの熟達度(proficiency)を目指すのかという点についても不明なままであった。
3. 外国語での運用能力習得のための重要な要素である学習時間への考慮が無かった⁴。
4. 科目を履修している学生の英語力を同じ尺度で客観的に測定する術が存在しなかった。従って、指導内容と指導方法を、到達レベルを基準として考案していくという意識が存在しなかった。

¹当時の共通教育改革の支柱として行われた事項として、本稿で報告する英語教育の改革の他、女性学科目と土佐学科目の設置があった。

²筆者 2 名の他、コーディネーターとして Michael Painter 氏（香港中文大学勤務(2011 年現在)）が開始当初の運営担当であった。

³旧カリキュラムでは次の 4 科目を履修し、8 単位を修得することとなっていた。

「英語 I」	英会話
「英語 II」	英語基礎
「英語 III」	英語読解
「英語 IV」	時事英語

「英会話」と「英語読解」は技能、「英語基礎」は習熟度、「時事英語」はジャンルに基づく区分であった。一貫性に欠ける構成であることは明白であり、これら 4 科目を履修していくことで、最終的にどのような力をつけさせたいのか説明されていなかった。

⁴当時のカリキュラムでは、8 単位を超えた履修は認められなかった。

従って、当該カリキュラムの見直しに当たって重要なことは、これら4つの問題点を解消できるカリキュラムを開発することであった。そして、本学の実態を踏まえた上でどのような展開が可能となるのか内容検討が開始された。

2. 特色

2.1 カリキュラムの枠組、指導目標、指導内容

2.1.1 枠組と指導目標

新しいカリキュラムを構成する科目は3種類とし、「英語コミュニケーションⅠ(ファウンデーション)」「英語コミュニケーションⅡ(スピーキング)」「英語コミュニケーションⅢ(ライティング)」を設置した。「英語コミュニケーションⅠ」ではリスニング力の増強をベースにした基礎力養成がねらいとなっている。高等学校までの英語学習において音声としての英語を聞く習慣が圧倒的に不足しているのは入学してくる学生の音読を聞けば明らかであった。従って、聞いて理解できる量と、理解した内容を口頭で操作できる量を増やしていきながら、総合的な英語力向上を図ることをこの科目の主眼とした。「英語コミュニケーションⅡ」では、様々な状況で英語で話すことができるようになることを目指した。「英語コミュニケーションⅢ」では、英語でまとめた文章を書くために必要なプラン立てと構成法を学ぶこととした。パラグラフライティング、エッセイライティングにおける文章展開の型に触れながら、伝えたいことを効果的に書く方法を習得することが目標となっている。

「英語コミュニケーションⅠ」

配当単位： 2単位

開講形態： 週2回

授業回数： 30回

習熟度別種類： 入門、初級、中級、上級

熟達度レベルに応じ4種類のクラスを設置することとした。2005年度に現行カリキュラムが発足した時は、学生の自己判断に基づく履修希望調査で開講クラス名簿を作成した。2006年度より基本的な英語力を問うテストとTOEIC IPのスコアをもとに習熟度クラス分けを行っている⁵。

「英語コミュニケーションⅡ」

配当単位数： 1単位

開講形態： 週1回

⁵ これら4レベルのクラスは同じ時間帯で開講されている。2010年度よりTOEIC Bridge IPに変更した。

授業回数： 15 回

習熟度別種類： 中級, 上級

「英語コミュニケーションⅢ」

配当単位数： 1 単位

開講形態： 週 1 回

授業回数： 15 回

習熟度別種類： 中級, 上級

指導目標

1. 基礎力の徹底的なマスター（特に口頭での伝達能力）。「知っている知識」として学んできた英語を「運用できる知識」に変える。
2. 自分たちの世界・社会をとりまく様々な問題について考え、英語で表現できる。
3. TOEIC であれば 600 点程度のスコア達成を熟達度の目標とした。

履修方法

英語科目から 8 単位を修得することが必須とした。このうち、基礎力の充実を図るために設置した「英語コミュニケーションⅠ」から最低 4 単位を必修させることとした。そして、「英語コミュニケーションⅡ」および「英語コミュニケーションⅢ」の履修は「英語コミュニケーションⅠ」から 2 単位を修得していることを条件とした。

特色

外国語習得研究において、語学を成功させる要素としての「繰り返し、反復」という側面を再評価する動きが近年見られる。このことを踏まえ、すでに履修した科目であっても繰り返し受講し英語に触れることができることとなった。また、8 単位を超える履修による単位修得も可能となった。

2.1.2 指導内容

教材

「英語コミュニケーションⅠ」

市販の教科書は使用していない。インターネット上で配信されている英語ニュース記事とその音声を素材として利用することとした。ニュースを利用することで学生の目を時事的な問題に向けることも狙った。所謂 NIE (News in Education) である⁶。さらに、英語教育を通じての情報機器の習熟もねら

⁶ 例えば Voice of America(<http://www.voanews.com>)のウェブサイトでは、英文記事と記事を読んだ音声ファイルが提供されている。各授業担当者には担当クラスの学生の専攻分野（看護学、社会福祉学など）を考慮に入れながら授業で使用するテキストを選択し教材化するよう依頼している。

った⁷。

「英語コミュニケーションⅡ」

2005年度は市販の教科書を使用。2006年度からは一定の教材リスト（活動用ワークシート）の中から各クラスに合ったものを担当教員が選んで授業内容を構成。

「英語コミュニケーションⅢ」

2005年度より市販の教科書を使用。2008年度から「英語コミュニケーションⅢ」（上級）クラスでは独自の教科書を使用することとなった⁸。

指導方法

本文の日本語で指導が完結してしまう授業形態から如何に脱却するかということは大きな課題であった。音声言語での運用能力を保障するために、指導内容について授業担当者全員に行ってもらう部分を設定した。音声の書き取りやシャドーイングなどはその例である。また、音声に比重を置いた授業を普通教室で行うことを考えて、入学者全員にポータブルプレーヤーを購入させることとした⁹。コースマネジメントシステムである Moodle を利用することで、担当教員は予習課題や学生への連絡をオンラインで行うことができるようになった。

評価方法

指導と評価を一体として捉える意図から、授業の中外で行う様々な課題（タスク）の成績を重視した評価を行うこととした。

「英語コミュニケーションⅠ」（授業内外のタスク 50%，中間試験 15%，期末試験 20%，TOEIC 15%）

「英語コミュニケーションⅡ」（授業内外のタスク 50%，中間試験 25%，期末試験 25%）

「英語コミュニケーションⅢ」（授業内外のタスク 60%，中間試験 20%，期末試験 20%）

2.2 カリキュラムの運営

共通教育英語科目の運営については文化学部内に設置された「英語教育改革委員会」によってコーディネートされていた¹⁰。通年の業務として以下の事項が挙げられる。

1. クラス分けテスト（4月第1回目の授業）
2. 2回生以上のレベル別クラス分け作業と掲示（4月）
3. 新学期開始時のオリエンテーション(4月)

⁷ 現在では教材配信および授業担当者と学生とを繋ぐインターフェイスとして、コースマネジメントシステムである Moodle を活用している。

⁸ 「英語コミュニケーションⅢ<上級>」クラス用教科書 *Putting Pen to Paper: An Advanced Reader and Writer*（高知女子大学文化学部英語教育改革委員会発行，2008年）を執筆して下さったアンドリュー・オバーク氏に記して感謝を申し上げる。

⁹ 2005年時点では MD プレーヤーが音楽再生の一般的なメディアであり、パソコン上で録音ファイルの変換操作に難しさを覚える学生が多かった。MD その後急速に廃れてしまった。現在では USB 端子に接続し、MP3 形式の音声ファイルを直接保存再生できる機種を購入させている。

¹⁰ 本委員会は 2009 年に「英語教育専門部会」と改称され、現在に至る。

4. TOEIC-IP 団体受験実施（学生への周知，受験室の確保，発注，スコアの検討[年 2 回，6 月，12 月]
5. TOEIC のスコアに基づく評価点の計算（「英語コミュニケーション I」受講生全員）と各授業担当教員への連絡
6. クラス分け作業（9 月，3 月）
7. 英語担当教員協議会・教材作成ワークショップ開催（9 月，3 月）
8. 開講クラスの検討と非常勤講師への依頼
9. 教材の作成と配信方法・器機の整備
10. EC チャレンジ開催（6 月，12 月）
11. 学生による授業評価実施（年 2 回，2005 年より実施）
12. 学生に対する履修指導，履修登録指導
13. 授業担当教員に対する技術面でのサポート

2.2.1 学生への支援体制

1. 学生への学習支援として，英語コミュニケーション科目のウェブサイトを立て上げた。授業についての各種資料はすべてこの英コミサイトで閲覧できるようになっている。
2. 年度最初の授業ではオリエンテーションを行い，「英語コミュニケーション I」で使用する教材へのアクセス方法について説明する場を設けている。また，新 1 回生用に，各科目の目標，評価，授業に必要なものについて解説したオリエンテーション用資料を作成している。
3. 予習の時に使うソフトウェアの使用説明の作成
4. オンラインでの履修希望登録受付と学生からの質問への対応

2.2.2 授業担当教員への支援体制

ワークショップ

2005 年度から年 2 回英語授業担当教員連絡協議会を開催。2007 年度は 3 回実施。毎回 10～15 名が参加。次学期の開講クラスの状況，授業改善や教材作成に関するアイデアについて意見交換を行っている。ワークショップは好評であった。日本人教員と外国人教員のいずれもが本学の英語教育改善に対し積極的な関わりを示してくれている方が多いことは非常に有り難いことである。授業のねらいや方法についてのコンセプトが共有できるようになってきた。3 年間で軌道に乗ってきた感がある。

3. 見えてきたこと

学習時間の増加

2003 年度，LL 教室機器更新計画が策定された。2004 年度の予算として計上され，2004 年 9 月に 24

台の Windows 機が導入され、計 50 台余りが一斉に利用できる環境が整備された。これにともない、カセットテープを使った音声再生から、ネットワークを利用してダウンロードした音声ファイルをパソコン上のソフトウェアで再生する方法に変えた。特定の語学教材や特定の利用方法でしか使うことのできないソフトウェアではなく、一般に出回っているソフトウェアを利用することで、教室での利用方法と自宅での利用方法の差を無くすように配慮した。結果、LL 教室の利用率は大幅に伸びた。加えて、学内ネットワークを通じて英語コミュニケーション科目専用のウェブサーバーを開設して以来、週日、週末、昼夜を問わず教材にアクセスし、自己学習のために利用する時間が増加した。

学生による授業評価

英語コミュニケーション科目が始まった 2005 年以来、学生による授業評価を導入している。質問用紙は 18 項目の質問と自由記述によるコメントを書いてもらう形式とした。1～5 は教材に関する質問、6～13 は授業者に関する質問、14～18 は学生本人に関するものである。

質問番号	質問項目
質問 1	授業の内容はわかりやすかった
質問 2	教材の量は自分には適切だった
質問 3	教材のレベルは適切だった(2005 年)難しかった(2007 年)
質問 4	教材はうまく作られていた
質問 5	オンライン教材をダウンロードする方法に慣れた(245, 287)
質問 6	授業の進度は自分に適切だった
質問 7	授業の内容は興味深かった
質問 8	授業の開始時刻・終了時刻は守られていた
質問 9	担当教員は学生に積極的に授業に参加するようにすすめてくれた
質問 10	担当教員は授業をうまく組み立てていた
質問 11	担当教員は英語を使う機会をたくさん提供してくれた
質問 12	担当教員は学習上の大事な点について明確に説明してくれた
質問 13	担当教員は授業を誠意を持って教えてくれた
質問 14	私は必要な準備をして授業に臨んだ
質問 15	私は授業中熱心に取り組んだ
質問 16	私は授業を受けて自分の能力が伸びたと思う
質問 17	私はこの授業を受けて、英語でコミュニケーションする自信がついてきた
質問 18	私はこの授業を受けて英語にいっそう興味を持つようになってきた

表 1 はカリキュラム開始時である 2005 年度前期(2005 年 7 月)に実施したアンケートと 2007 年度後期(2008 年 2 月)に実施したアンケートの結果を比較したものである。集計の結果、教材のレベルに関する感想については大幅な変化は見られないが、それ以外の項目では高い肯定的意見が得られた。授業のわかりやすさ、授業の組み立てについて教員が意識しながら授業を行っていることが窺える結果となっている。

特に注目したいことは学生の自己評価の部分についてである。質問 14～18 に対して肯定的な回答が大幅に増えている。力がついた、自信がついた、興味が出てきたということを実感する学生が増えているのは本カリキュラムの特に成功した点であるといえる。

表1: 学生による授業評価アンケート結果

2005年度前期と2007年度後期時点との比較[N=416(2005年度), N=444(2007年度)] (質問5のみ N=245 (2005年度), N=287 (2007年度))

	強く思う			そう思う			どちらかという と思う		計		どちらかという とそう思わない		そう思わない		全くそう思わな い		計	
	2005	2007	2005	2007	2005	2007	2005	2007	2005	2007	2005	2007	2005	2007	2005	2007	2005	2007
質問1	18.5	25.2	32.0	43.2	25.7	22.3	76.2	90.7	76.2	90.7	13.2	7.9	8.7	0.7	2.6	0.7	24.5	9.3
質問2	14.2	26.1	31.5	40.3	26.2	27.3	71.9	93.7	71.9	93.7	17.1	4.7	8.4	0.7	2.6	0.9	28.1	6.3
質問3	12.0	5.0	24.5	11.5	32.7	22.3	69.2	38.8	69.2	38.8	18.3	37.2	9.1	15.8	2.9	7.7	30.3	60.7
質問4	13.0	18.7	22.6	38.7	32.0	29.7	67.6	87.1	67.6	87.1	15.9	7.4	10.6	1.6	4.3	0.5	30.8	9.50
質問5	6.9	25.8	13.5	39.4	22.4	24.0	42.8	89.2	42.8	89.2	22.0	8.4	15.9	1.4	19.2	1.0	57.1	10.8
質問6	16.6	25.2	25.5	41.9	31.7	26.6	73.8	93.7	73.8	93.7	17.5	4.5	6.7	1.6	1.4	0.2	25.6	6.3
質問7	18.8	22.5	23.3	37.6	27.2	23.6	69.3	83.7	69.3	83.7	18.3	11.9	7.7	2.7	4.1	1.4	30.1	16.0
質問8	46.4	46.4	34.9	32.0	13.2	12.6	94.5	91.0	94.5	91.0	3.1	5.0	1.9	3.4	1.0	0.5	6.0	8.9
質問9	36.8	37.8	27.2	33.6	23.6	21.2	87.6	92.6	87.6	92.6	7.5	5.2	3.1	1.6	1.2	0.7	11.8	7.5
質問10	29.1	33.6	26.4	36.9	26.2	19.4	81.7	89.9	81.7	89.9	10.8	7.0	4.8	2.0	2.6	1.1	18.2	10.1
質問11	30.3	34.7	26.9	30.2	23.1	22.1	80.3	87.0	80.3	87.0	12.7	9.5	5.5	2.7	1.4	0.2	19.6	12.4
質問12	25.0	28.2	29.1	37.8	28.1	23.0	82.2	89.0	82.2	89.0	10.8	8.1	4.30	2.3	2.4	0.5	17.5	10.9
質問13	41.1	45.0	28.1	36.5	22.6	13.7	91.8	95.2	91.8	95.2	4.3	4.3	2.2	0.5	1.7	0.0	8.2	4.8
質問14	13.2	15.5	20.9	36.7	35.6	30.9	69.7	83.1	69.7	83.1	20.0	14.0	7.9	2.0	2.4	0.7	30.3	16.7
質問15	15.4	19.8	25.2	33.1	37.0	34.9	77.6	87.8	77.6	87.8	15.6	10.1	4.8	1.6	1.9	0.5	22.3	12.2
質問16	9.4	10.4	17.1	24.8	34.1	39.0	60.6	74.2	60.6	74.2	24.0	19.8	9.9	4.5	4.1	1.4	38.0	25.7
質問17	4.3	9.5	13.0	16.4	21.9	38.5	39.2	64.4	39.2	64.4	32.5	27.9	18.5	5.9	8.7	1.8	59.7	35.6
質問18	13.0	16.9	15.6	26.4	31.0	32.9	59.6	76.2	59.6	76.2	19.2	17.6	13.2	4.3	7.9	1.8	40.3	23.7

学生の声

- ・ 後期が一番英語を勉強させてもらった。(ECI)
- ・ 教材が興味深いものが多かったので楽しんで授業を受けられました。(ECI)
- ・ 単語テストをしてほしい。
- ・ もう少し学生側が積極的に参加する必要があるけど、そのために授業の最初に英語でクイズをやるなどして、楽しく授業を受けられる空気ができると思います。(ECI)
- ・ 先生はとてもわかりやすく授業を進めてくれました。でも、もっと話す機会がほしかったです。(ECI)
- ・ 先生の取り組みはよいと思います。(ECI)
- ・ 3回に1回、暗唱、単語のテストがあったことで、1つ1つの教材をしっかりと勉強することができた。英語は見たり書いたりするだけでなく実際に声に出して読んでみるのが大切だと分かった。(ECI)
- ・ 文法に関する説明が少しでもあればよいと思う。(ECI)
- ・ 先生のおかげで英コミも EC チャレンジも楽しかったです。(ECI)
- ・ EC チャレンジが本当に忘れられません。とても楽しかったです。お疲れさまでした。(ECI)
- ・ ちょっと私にはレベルが高すぎたけど、班学習だったので何とか耐えた。TOEIC の点数でクラスをわりふるのはやめてほしい。(たまたま TOEIC でいい点とった英語力のない人はどうすれば・・・) 授業の成績でわけてほしかった。(ECI)
- ・ 最初は厳しい先生だと思ったけど、私たちの英語力を上げようとしているのがわかってよかった。(ECI)
- ・ 初めてのネイティブの先生の授業を受けて、緊張もしたが、すごく楽しくできた。日本人の先生と違ってアメリカとの違いや、学生の名前をちゃんと覚えていてくれて嬉しかった。(ECI)
- ・ ちょっと宿題が多かったです。でも、授業内容は楽しかった。(ECI)
- ・ 授業の内容に関するビデオを見ることにより興味が持てた。(ECI)
- ・ 英語力をもっとつけたいです。(ECI)
- ・ 今とても海外の社会福祉に関心が強く、休学して留学しようか悩んでいます。(ECI)
- ・ 授業の進む速さがよかったです。楽しい授業だったのでがんばれました。(ECI)
- ・ ディクテーションが面白かった。(ECI)
- ・ EC チャレンジの練習時間をもっと確保してほしい。(ECI)
- ・ 私たちが親しみやすい教材から興味がわくような関心がわくような教材まであって良かった。(ECI)
- ・ 先生は日本人なのにずっと英語をしゃべってくれてよかった。私はあんまりわからなかったけど。シャドーイングのテストは練習したらできたので毎回ちゃんとすればよかった。(ECI)
- ・ クラスの中で英語を口に出して読む機会がとても多くて、よかったと思う。朝一の授業なので声を出すことはとってもよい。(ECI)
- ・ 毎回色んな工夫をしながら計画的に授業をすすめてくれていたと思います。教材のレベルはさすが大学と思いました。考えられています。(ECI)
- ・ 自分のレベルに合った授業クラスではないような気がした。先生は常に英語で話していたので、最初は意味が分からず、戸惑ったが、最後は意味が理解できるようになったので、よいと思った。(ECI)
- ・ ペアワークが充実していてよい会話練習ができた。(ECII)
- ・ 今までの英コミの中で一番楽しく学べた。(ECII)
- ・ 授業は楽しくて面白く、英語が今まではあまり好きではなかったけど、話すことが楽しくなってきたと思う。(ECII)
- ・ とっても楽しい授業でした。これで終わりになると思うとさみしいです。(ECII)
- ・ また受講したいです。(ECII)
- ・ 楽しい授業でした。英語はやはり speaking が一番。(ECII)
- ・ 英語を話す機会ができて、とても勉強になった。(ECII)
- ・ 英語にとっても興味がもてた。とってもいい先生だった。(ECII)
- ・ とてもやる気のある先生で面白かった。
- ・ 学年を越えて1回生の子たちともふれあえました。(ECII)
- ・ 日本語でどうしても話してしまうことがあるのでこまったりしたけど楽しかった。(ECII)
- ・ すべて英語で話していたので、英語にすこし慣れた気がした。(ECII)
- ・ 初めての授業の時は、一人も知り合いがいなくて焦ったけど、授業を通してほとんどの人と話せるようになった。とても楽しい授業でした。
- ・ ECII にも初級クラスを作ってもらいたいです。私の英語では稚拙で、一緒に授業を受けるのが申し訳なく思うことも多いので。(ECII)
- ・ 実践的な英語が学べてとても楽しい授業だった。(ECII)
- ・ プレゼンテーションは緊張するけども、英語を話す良い機会だと思う。(ECII)

- ・ 解説が非常にわかりやすかった。(ECIII)
- ・ 授業進度が私にはピッタリでとてもやりやすかったです。(ECIII)
- ・ とても分かりやすい授業で、細かく添削もしてもらうことができ、良かった。(ECIII)
- ・ 英作能力が高まったのでよかった。(ECIII)
- ・ 私にとっては難しい授業でした。もう少し詳しい説明が欲しかったです。(ECIII)

TOEIC-IP について

表 2 は 2005 年度以降実施した 6 回の TOEIC-IP での得点分布表である。各回とも前期の受験者と後期の受験者は全く同一というわけではない。後期のほうが少ない。

表 2: 2005 年度～2007 年度における TOEIC IP 受験結果

実施時期	受験者数	平均値	標準偏差
2005年第1回目（前期）	227	361.1	83.9
2005年第2回目（後期）	244	366.7	94.0
2006年第1回目（前期）	364	371.5	94.0
2006年第2回目（後期）	278	373.4	101.7
2007年第1回目（前期）	434	366.1	95.9
2007年第2回目（後期）	389	363.9	95.4

全体の平均スコアは 360～370 点を推移している。2006 年度では平均 373 点まで上昇していたが、2007 年度になり 10 点ほどダウンしている。授業方法の改善、学生の満足度が高まっているにもかかわらず全体的な低下が見られた。

図 2～6 は得点別の分布を示したものである。各回とも平均点周辺の人数が多くなっている。いずれの回にも期待を上回るスコアを達成するものが見られた。また同時に、通常の TOEIC では英語力を測定できないと思われる層も存在していることがわかった¹¹。

¹¹英語学習に対する自信の無さを大学入学以前より引きずっている学生が数多く見られる。ビジネスシーンが多く分量も 2 時間ほど必要な通常の TOEIC は、初歩からの学習のし直しが必要な学生にとってはハードルが高く、本当の熟達度・習得状況を見ることは困難である。2010 年度に TOEIC Bridge IP に変更したのはこの理由による。

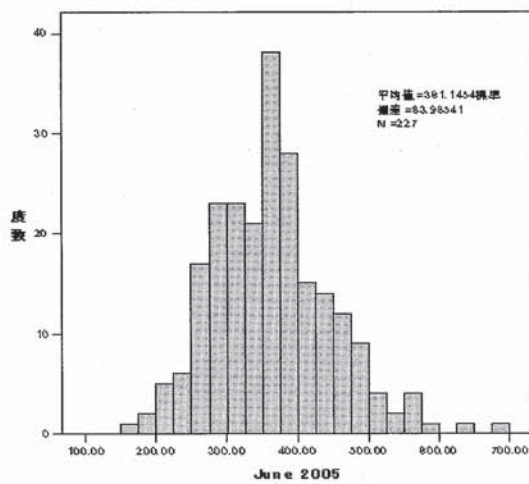


図 1: 2005 年第 1 回目 (前期)

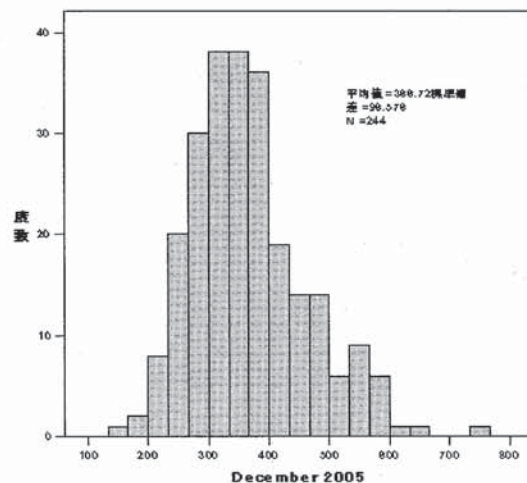


図 2: 2005 年第 2 回目 (後期)

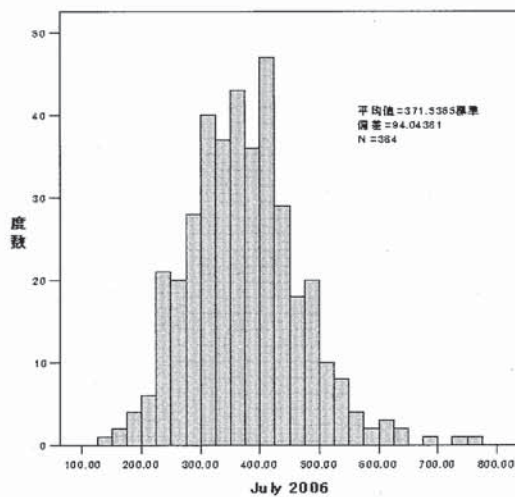


図 3: 2006 年第 1 回目 (前期)

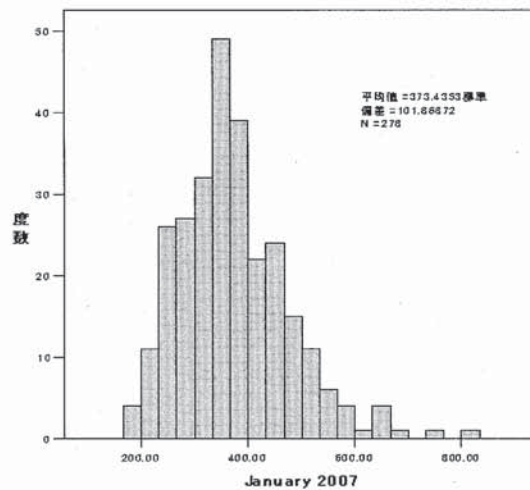


図 4: 2006 年第 2 回目 (後期)

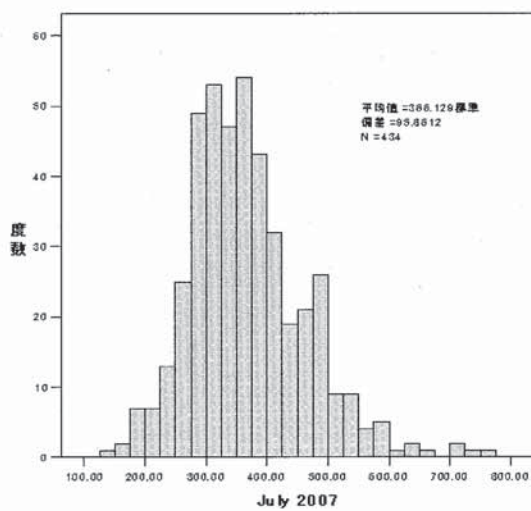


図 5: 2007 年第 1 回目 (前期)

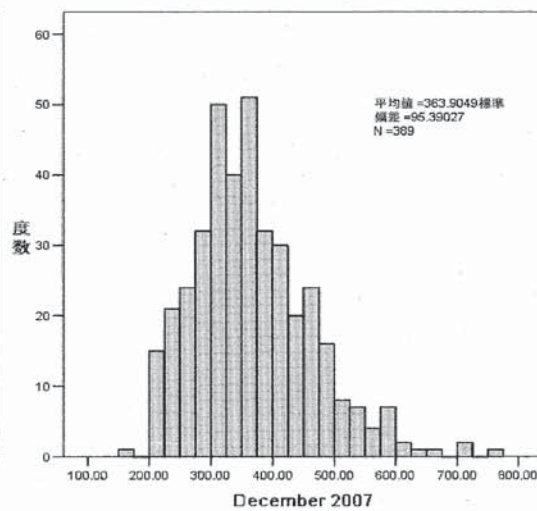


図 6: 2007 年第 2 回目 (後期)

EC チャレンジ

英語を使う場を教室の中だけにとどめるのではなく、人前で使う機会を経験させることをねらいとして、2006年度後期から発表会形式の催しを実施している。2007年度は2回（2007年6月、2008年1月）実施。永国寺、池の双方のキャンパスで同時間帯にすべてのクラスが集まり、それぞれのクラスで学習した内容などを発表している。実施後に行ったアンケートによると、よい機会だった、続けることに賛成する、とする回答が多かった¹²。

5. おわりに

以上、2005年度から始まった共通教育英語科目改革の取り組みを概観した。本報告がベースになっている2007年時点からすでに3年が経過しており、この間様々な変更が生じている。新学部を設置や入学定員の変更により開講クラス数は大幅に増加した。さらに、2011年度より男女共学となるので、新しい展開が必要になるだろう。今後の変化に対応した取り組みについてはまた時期を改めて報告したい。

¹² 2009年度より「英語コミュニケーションⅡ」履修者のみが参加する形態に変更した。

Appendix 1: 新カリキュラム発足時の「共通教育英語担当者会議」(2005年7月)での当時の青山康英学長のコメント

First of all, I'd like to express my sincere gratitude to all of you for attending this meeting to help improve Kochi Women's University's new English education program.

As many of you already know, the environment surrounding the administration and management of Japanese universities and colleges is becoming increasingly competitive and formidable. All the former national universities had been assigned corporate status by the end of March 2004.

In addition, the unprecedented rapid decrease in the number of children and aging of Japanese society are unprecedented rate. No university can be free from being tested for its existence. As for prefectural and city universities, a law that regulates privatization has been passed and put into effect already.

I have passed by the halfway mark of my term of four years in office. My greatest concern is to advance the so-called "university reform" during the remaining two years, in view of the potential privatization of Kochi Women's University and the picture of the University that will manifest as a result of the reform.

Now let me emphasize that the University's commitment to local areas and communities throughout Kochi constitutes an essential part of the university reform. This emphasis represents our serious reflection on the fact that universities in Japan are being criticized severely for having neglected the spirit of community-orientedness for too many years.

The idea of self-government by the faculty and freedom of academic pursuit or academic freedom have formed the core part of university administration and management so far. However, I must submit that these ideas can be maximally respected as far as contribution to local communities is achieved.

At Kochi Women's University, we have reached agreement that, to meet the criticism

from the society against the conventional type of academics, it is necessary to provide our students with good education, which I would define as an "imperative duty". We have also confirmed that more interdisciplinary efforts need to be made in educational and research activities.

In 2004, we made an investment in the project for renovating students' environment in learning spoken English. This project represented the greatest investment amongst the proposals of that year. In 2005, we made major changes in the general education curriculum. This curriculum specifies that English Communication, Women's Studies, and Tosagaku (Studies on the Tosa/Kochi Area) courses are mandatory courses that all Kochi Women's University students take and finish. I intend this decision to be a practical approach to our task of producing graduates who can understand people from overseas and convey their ideas in English, who, as graduates from a women's university, are knowledgeable about issues relating to women and gender, and who, as graduates from the University of Kochi Prefecture, possess in-depth knowledge of wide-ranging aspects of on Kochi.

Lastly, let me talk about the benchmark pertaining to the English curriculum. As president of Kochi Women's University, I hope two things. One is to produce an even greater number of excellent students, and the other is to raise the overall level of students in some measurable way. As the curriculum just started, I would like to ask you to consider and develop a suitable system for evaluating students' learning results by all means.

I'm afraid that too much is expected of you despite the scarce budget expected to come by. Yet, I'd still like you to share your wisdom and help to find ways to make the project successful.

Thank you very much.

Appendix 2: 新カリキュラム開始時に作成したパンフレット

Kochi Women's University English Communication Program

使おう英語！伝えるために！
Get Your English Here!

高知女子大学の英語教育
共通教育コミュニケーション

Yeah, I understand now. Thanks. That was fun!

Well done! You can do it!



高知女子大学の英語教育は、
基本を大事にします。
応用力も高めます。

「うーん、英語は苦手だわ。」
「聴けるように聞きたい。」
「読むのが苦手でいい。」
「どう読みたいのかわからない……」

あなたも、こんなふうに悩んだことはありませんか？
これまでの英語学習が頭を固めてしまっしょう。
いちばん得意な聞いていなかったことはなかったでしょうか？
考えだすそこにあるのです。

人は3歳頃までに3,000時間英語を耳からインプットを続けているといわれています。
そのため、今までは英語を聴いて耳に声出して聴覚を覚悟させてこれくらいに
なるでいいや？
だまーって英語を聴覚している状態にどことなく違和感になりますか？

豊かなアプトブツの前提にあるのは豊かなインプットです。

高知女子大学英語コミュニケーション科では内容のある英語を聴きこもり聞いてもらい
ます。きっちり聴き取った内容を、きっちり声に出せるようにするてもらいます。
学習の質・量を2倍に。聴解・理解をサポートしていきます。

新しくなりました！

1. 同じ科目を繰り返し履修できるようになりました。
初めより1年間で必要な科目を履修できるようになりました。
2. 世界の様子や伝ええる英語ニュース(ニュース)を教材としました。
知ることの喜び、学ぶ楽しさを身につけてます。
3. 教科書や授業上の連絡を大抵にオンライン化しました。
スマホを使ってリアルタイムでインプットできます。
4. 年2回のTOEIC受験で満足度を診断するようにしました。
年毎に自分のレベルがわかるようになります。

特色

英語を「書く」という技術的な事項を極力抑えることからの授業です。
 目で読める英語を「**目で読める**」ようになるのが目的です。
レベルに応じたクラス分けを行い、勉強したい科目を選択可能です。

生きた英語が学べる教材を揃えています。
 『**News**』(News in English)として、英語版のニュース放送を扱った教材があります。
 90秒程度のものであるため、授業中に教材を自由に取り入れられます。
 『**知って**』から『**できる**』まで揃っています。

情報機器を使うスキルをアップさせます。授業で英文入力や画像検索はコンピュータで習得されます。

授業内で「**自己学習の確立と辞書の一体化**」をめざします。

4年間学習を続けられるようになっています。卒業生の数も上増していますが、授業内容の更新も定期的に行うこととすることで可能です。

年2回のTOEIC受験で学習成果を数値的に確認することができます。

開講科目

英語コミュニケーションⅠ (ファウンデーション)
 【中級】自分の生活などについて話し合いが持てるようなインプットと聴力が養われます。
 【初級】少し短めのスピーチで簡単な英語表現が扱われます。

【中級】自分のスピーチで簡単な英語表現が扱われます。
 【初級】自分のスピーチの目的を簡単な英語で人に伝える英語表現が扱われます。


英語コミュニケーションⅡ (スピーキング)
 【中級】英語と英語と生活について、英語と生活の関わりを学ぶことができます。
 【上級】英語の話し方、英語の聞き方、英語の書き方、英語の読み方を学ぶことができます。

英語コミュニケーションⅢ (ライティング)
 【中級】英語で簡単な文書を書くために必要なプランニングと構文知識を身に付けます。
 【上級】トピックから決めたい文書を書く構文知識を身に付けます。

高知大学次学 英語教育 英語教育推進室

〒890-0055
 高知大学東キャンパス 115
 高知市 大塚

電話 0985-312-2703
 内線 0985-312-2704
info@english.kochi-u.ac.jp



[illegible]

(いおろい たかひろ・本学教授)
(やまぐち よしなり・本学准教授)